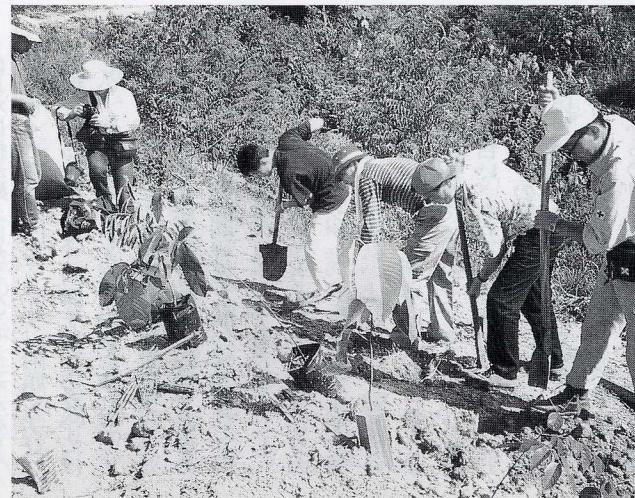


# 国際協力研究科政治社会動態論コース

## 一 研究の対象と方法の性格について

大学院国際協力研究科 政治社会動態論コース主任 ◆ 野 原 光



開発援助と理論とを深く切り結ぶことが必要

### 三つのコースの役割分担

岩田の各先生が、国際協力研究科の全體像を、ありますところなく描いてくださった。私にはほとんど何も付け加え

ることがない。そこでどうしたらいいか。このうえは、これまでの大局的な論説を前提にして、個人的な肉声、小局的な感想の開陳をもって、研究科の多面的な実態を浮き上がらせる一助にしたい。

開発計画コース、開発技術コースは、発展途上国の現状を開発する計画、政策及びその技術的方法を研究し、教育する。これに対して政治社会動態論コースでは、開発される現状そのもの、及び開発された結果、あるいは開発の現状への影響を研究し、教育する。それから見ようというわけである。その意味では、初めの二つのコースの性格が、事態を変える先駆けという点にあるとすれば、このコースのそれは、事態を固める後詰めという、どちらかといえれば地味な役割を果たす点にあるかもしれない。

このシリーズで、山下、齊藤、杉恵、岩田の各先生が、国際協力研究科の全體像を、ありますところなく描いてくださった。私にはほとんど何も付け加え

な華麗さはないけれども、後詰めは事態をしつかりと固めなければならない。つまり事態を深く捉えて、先駆けの計画提案が上滑りしないで済むような、そういう現状認識を提出しなければならない。ここに三コースの連携プレイが成立するはずなのである。

それでは事態を深く捉えるためにどうすればよい。ここで、我々は研究対象と研究方法の重層性をいつも念頭に置くべきだと思う。研究対象を考えるにあたっては、何よりも念頭に置いてみよう。援助であれば援助する側の論理と援助される側の論理、開発といえば、開発する側の論理と開発される側のそれ、国際関係では、大国の論理と小国の論理、こうした両側面をいつも分析の視野に入れなければ、事態の深部を捉えることは難しい。

筆者のささやかな、しかし手痛い経験を想起してみよう。一九六〇年代から七〇年代にかけて、日本の地域開発も分析の視野に入れなければ、事態の深部を捉えることは難しい。

研究方法もまた「筋縄ではいかない」いうまでもなく「開発援助」や「国際協力」という確立した学問分野がある。それではしかし、この「応用学問」が、雑多な夾雜物の三流学問として、そこには固有の文法があるというわけではない。対象はまさに「応用学問」の中の応用学問として研究されるのである。それではしかし、この「応用学問」が、近代合理主義の申し子たる「純粹諸科学」の後塵を拝することにならない

### 応用学問と大理論

めには、どうすればよいか。

第一には、何らかの大理論（グランド・セオリイ）と深く切り結ぶことである。それがどの学問領域のものであつてもかまわない。現実そのものは、経済学、政治学、社会学等の、人為的につくられた学問領域の対象として、おとなしくおさまっているわけではないからである。逆に言えばどの領域の大理論であれ、その射程距離が真に長ければ、我々の認識の助けにならないはずはない。この大理論と取り組むことは、言つてみれば、人類の知的遺産の最高の達成から、社会科学的な認識の眼を継承することである。これなしで徒手空拳で現実という巨大な風車に立ち向かうようなものである。現状は時々刻々に変化するから、「調査」をすれば、何かを書くことはできる。しかしそれでは、何故その事態が起こったのか、その事態は全体の中でどんなコンテキストに置かれているのか、こうした点で、事態の深部を捉えられない。つまり累々たる調査研究の「屍」が積み上げられながら、認識はいつかな深まらない。こういうことになるのである。

我々の目的は対象の応用的な分析にあるのであるから、それに理論の勉強が必要だというのは一見奇異に聞こえるが、これは、その理論を直接に適用して現状を解釈することを意味しない。この間の難しい関係について、内田義彦氏は一言で次のように説明している。

「あの人は、長年ウェーバーを読んできただけあって、なるほど、あの人に現実があのよう見えるのか」と。この言に便乗するならば、一言のウェーバーの引用もなく、ウェーバーの認識装置を生かし切って、まさに現実に肉体では、初めの二つのコースの性格が、事態を変える先駆けという点にあるとすれば、このコースのそれは、事態を固める後詰めという、どちらかといえれば地味な役割を果たす点にあるかもしれない。

だがこのことは、このコースの役割ではない。このコースの役割は、現実がどのように見えるのか」と。もう一つこの点では、比較研究といふものの重要性を指摘する必要があるだろう。他者を知ることで、初めて自己の位置を相対化することが可能になる。かつ自己をも他者をも、より普遍的なもののタイプの差として理解することが可能になる。こうして真の相互理解も可能になる。アジアと日本と欧米を同時に視野に入れることが必要な深い見疇などではないとなかなか難しい。是非、勧めたいゆえんである。

第二には、先の点にも結びつくが、普遍化、一般化の習慣と能力を養うことである。まず、学際的な研究を成立させるためには、異領域の言語、文法が理解できなければならない。あるいは逆に、異領域に理解可能なよう語れなければならない。次に、ある人がある領域で壁にぶつかったとき、同時に生きている限り、他の学問分野でも同質の問題にぶつかっているにちがいない。その領域では、どんな立ち向かい方をしているか、この点の理解が自分の問題解決に効いてくるのである。

ただしこの点を理解するためには、これまでの問題解決に効いてくるのである。つまり異領域間の翻訳能力、普遍化、一般化の能力は、広い関心と、大理論との格闘を通じての抽象と具体的の問題の往復運動のトレーニング、事態を常に原理の根底から捉える習慣の形成、

### 普遍化、一般化の習慣と能力

#### 研究の「僻地」を逆手に取る

研究方法の第三点であるが、東京でも大阪でもなく、広島といういわば研究の「僻地」にあることをどう踏まえるか、という問題を考えなければならない。情報の鮮度、スピードという点で競争しようとすれば、東京にかないようがない。だが問題にじっくりと取り組んで、視野の広がりと問題を捉える深さで勝負しようと思えば、情報の氾濫に目移りしないだけ、「僻地」を逆手に取ることができるのでないか。氾濫する情報のうちから、自分にとつて意味あるそれを選びだす。つまり、日常的消耗材と耐久消費財もどちらも欠かせないよう、我々は耐久消費財生産でいきたいと思うのである。（のはら・ひかり）

#### 政治社会動態論コース

授業科目	博士課程前期	博士課程後期	世界秩序論演習	世界秩序論特別講義	社会動態論演習	社会動態論特別講義	政治秩序論演習
教官名			西高 谷 城 柏 和 葉 元	小松 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱	中金 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱
			西高 谷 城 柏 和 葉 元	小松 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱	中金 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱
			西高 谷 城 柏 和 葉 元	小松 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱	中金 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱
			西高 谷 城 柏 和 葉 元	小松 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱	中金 原 正 行 示	中金 柏 雅 嗣 柱